



撮影：新建築社写真部

## 100歳の集合住宅

### ——歳を重ねた時にどのように住まうのか 第9回 長谷工 住まいのデザイン コンペティションへ向けて

隈研吾×乾久美子×藤本壮介×池上一夫

今回で第9回を迎える「長谷工 住まいのデザイン コンペティション」。2007年に長谷工コーポレーション創業70周年を記念して第1回が開催され、これまで建築を志す多くの学生に集合住宅にまつわる課題に取り組んでもらいました。前回の第8回「ある地方都市のストリートが集合住宅で再生する。新しい暮らしがはじまる」では、地方の集合住宅が持つ新たな可能性について考えてもらいました。第9回の開催に先立ち、今回の課題や、今、集合住宅をどう考えるかなどを審査委員の方々に話し合っていました。 （編）

#### 街、空間、そこで起こることを考える

——前回の課題「ある地方都市のストリートが集合住宅で再生する。新しい暮らしがはじまる」と入賞案はいかがでしたか。

**隈** 前回の最優秀案（右真）はしっかりと考えられている案だと感じました。街との関係、そこで起こることを考えた上で空間が提案されていたので、これが最優秀になったのは順当だったと思います。他の入賞作品を見ても、バリエーションが多様で、レベルは非常に高かったと思います。

**乾** 最近の傾向として、コンペ案は平面だけ、あるいは断面だけに特化した抽象的な案が多いのですが、前回の課題では立体的に考えられている案が多くて、しっかりと建築にしようという意図が見られたのがよかったです。長谷工のコンペは毎回、全般的に、具体的な建築にまでアイデアを落としこんでいる案が多いなと感じています。

**藤本** 前回は「地方都市」とか「道を挟んだ敷地」といったキーワードが効いていて、学生にとって何かを考えてみたいと思わせるようなテーマになっていたのではないかと思います。ただ、小手先だけではうまくいかない、ちゃんとした思考を要求するテーマでしたので、時間をかけてしっかり練り上げられていた案が入賞していると思いました。

**池上** そうですね。テーマが具体的だったので、そこから読み取れる内容が多く、取り組みやすかったのだと思います。一方で、いざ取り組み始めると、裏路地があったり、敷地が道路を挟んでふたつに分かれていたり、敷地の情報が多く、対応を考えなくてはいけないこともたくさんあって、途中で断念する学生も多かったのかもしれない。

#### しっかりとした建築のかたちの提案を

**藤本** 前回の審査では、あえてかたちをつくらずに既存の「もの」との新たな関係のみを示す案が多くて、それが現代を表していて面白いなと思っていましたが、若い人があまり「もの」をつくりたがらない傾向にあるのはよくないことだと思います。

**乾** 今の学生は、「やっぱり、かたちをつくらないとダメだよね」という人と、「かたちをつくらなくてもよい」という人と、考えがふたつに分かれています。と思いますが、楽観的というか、いい意味であり考え込まない人はちゃんとかたちをつくるように思います。

**隈** 確かに最近の学生の中には、つからないという選択をする人たちがいますね。しかし、建築は結局「もの」として立ち上がるので、つからないという選択肢はあり得ません。建築をつくと、どんなものでも批評されるのですが、若い人の中には自分がつくったものを否定されたくないからかたちをつくりたくないと思っている人もいでしょうね。今回のテーマは、誰もが建築のかたちを提案できるようなもののがよいですね。長谷工が考える集合住宅から、何かヒントを得られないでしょうか。

**池上** 当たり前のことですが、長谷工コーポレーションでは実際に建てなければいけないので、常にかたちになっています。さらにわれわれが今までに手がけてきた57万戸の設計施工の経験がフィードバックされていて、非常にシステムチックなものづくりの仕組みになっていて、一見すると画一的な様に見えてしまうかもしれませんが、それぞれのプロジェクト固有の条件に応じて手づくりで丁寧につくっているのです。

#### 集合住宅「単体」の可能性

——それでは今回の課題ではどういうことを考えるとうよいでしょうか。

**乾** 今までのテーマを見返してみると、4回目の「10の違うものが集まる100戸の集合住宅」以降、街との関係を求めるものが多いですね。

**藤本** 確かに最近はそうですね。集合住宅は、ある程度の人数が住むことで小さな社会ができますし、周りの街との関係を考えなければいけませ

ん。このコンペを考える上では、そういうことをきちんと考えてみるべきだと思います。一方で、先ほどの話とも繋がりますが、あえて集合住宅「単体」でのあり方を問うた時にどのようなアイデアが出てくるのか、どのような新しい集合住宅のかたちが出てくるのかも重要だと思います。

**池上** 長谷工コーポレーションのマンションづくりは、エリアのマーケットに応じたつくり方をしている、住む世代を具体的にある程度絞り、かたちをつくっています。集合住宅自体のあり方を考えると、今までのマンションはだいたい同じ世代の人たちが集まり暮らしていましたが、これからの時代は、さまざまな世代の人が住めるように、老人ホームや託児所もその中に取り込んでいくべきでしょう。さらに共用部の運営の仕方についても考え直す必要があると思います。

**乾** では、そのような今後の集合住宅の可能性から今回のテーマを考えてみるのはどうでしょうか。若い世代から高齢者までという多世代の集合住宅と考えると、生死の問題や人のアクティビティのバリエーションも増えるので、空間的なありかたを考える余地が広がるのではないかと思います。例えば、高齢者は朝早く起きますよね。そうした生活のリズムが違う人が集まると考えることで、これまでとは違う住まい方や生活が生まれる可能性はあるのではないのでしょうか。

**藤本** しかし、若い世代から高齢者までを含めてしまうと、典型的なサラリーマン家庭のように、ひとつのステレオタイプになってしまいませんか。それこそいろいろな職種、国籍、生き物のように多種多様なものたちが住んでいる、というのはどうでしょうか。

**隈** 多様性を広げすぎると、弊害もいろいろ出てくると思います。例えば、その多種多様性のバリエーションを考えることで力尽きる人もいられるかもしれません(笑)。

**藤本** そうですね。確かに多種多様であることは考えの幅を広げはしますが、問題が拡散してしまうかもしれません。応募者に何を具体的に提案するのか考えてもらう必要がありますね。配慮しなくてはならない「違い」があるだろうし、多種多様中では共通するものもあるかもしれない。それを

見付けてもらうというのもよいかと思います。公共空間では、生活のリアリティがそこまで入ってこないんで、その「違い」について考える必要はないかもしれません。しかし、集合住宅だとまさにそこに生活があるので切実な問題が現れてくるのではないのでしょうか。生活があると許容できる範囲も人それぞれ変わってきますよね。関わりが深くなるかもしれないし、逆に閉じたものになるかもしれない。多様性は現代の建築においても重要な要素だと思います。建築に求められている問題を整理して解決していくよりも、なるべく包括的に受け入れた上で統合するような建築ができないかなと思います。

**乾** 多種多様であっても、何か設定を決めた方がよいですね。先ほどの話に繋がりますが、多様な設定だけを提案して結局建築がかたちづかれていない案が集まる可能性があります。多様性がなぜ重要なのかというと、それで生み出されるネットワークがどう構築されるのか、という問題が重要だからです。全然違うものをばらばらに集めればよいのではなく、多様性がある中でどういうネットワークが生まれるのか、ということを考えてもらうのが重要だと思います。

#### 高齢者から考える豊かさ

**隈** 多世代の集合住宅から多種多様なものたちが住む集合住宅というように話が広がりました。多世代、多種多様な交流のきっかけのひとつとして高齢者について考えてみるのはどうでしょうか。

**乾** 高齢者のことを考えるというのは今まできちんと挑戦をしていませんでした。ただ、高齢者に寄りすぎると、高級な老人ホームになってしまわないかなと不安ですが(笑)。

**隈** 普通、高齢者について考えるとケアという側面に目を向けてしまいがちです。例えば、一般的な老人ホームでは、入居者は日中個室ではなく、職員の目が行き届きやすい食堂のような広い場所に集められています。そこでは高齢者の自由度はかなり低いのです。だから、もっと高齢者のことを考えた集合住宅というものがあってもよいと思うのですが、そのためにはこれまでと異なる高齢者の定義の仕方が必要になると思います。

**池上** そうですね。老人ホームはやはり安全第一の側面が強く、合理的に管理ができるように設計されています。もっと多世代と交流できるような場所や仕組みづくりが必要だと思います。しかし、学生にとって高齢者というのは画一的なイメージし

か浮かばないのではないかと思います。高齢者と言っても、介護の必要な方や、アクティブシニアもいる。高齢者のさまざまなバリエーションはちょっと想像しにくいのではないのでしょうか。

**乾** 高齢者というとネガティブなイメージを持ってしまいがちですが、例えば美術や映像の方では高齢者とコラボレーションするような表現が出て来ていて興味深い状況です。自分の母親の介護のドキュメントなど高齢者の問題を取り扱った作品などが新鮮な表現となっている事例があります。そのような作品を見ていると、老いそのものに現代のアーティストが想像力を刺激される時代になっていると思います。今回のテーマでも、老いることによって生まれる豊かさを考えてほしいという前向きなテーマにするのがよいのではないのでしょうか。

**藤本** 高齢者という風にある程度ターゲットを絞ることで考えやすくなると思いますし、可能性も感じます。現在の高齢者の問題を解決するだけではなく、自分が年老いるまで、そこでの生活をリアルに、想像力を動かさせて考えてほしいなと思います。そのように考えることが、建築の多様性というものに繋がっていくのではないのでしょうか。

**池上** では、「0から100歳までの集合住宅」というタイトルはどうでしょうか。多世代で暮らすことは、どの世代にとっても幸せなことだと思います。例えば、子どもにとっても高齢者がいるという生活環境がよいと思います。

**隈** 多世代と言ってしまうとひとつの紋切り型にはまってしまうのではないのでしょうか。今回は、高齢者に対する想像力をかき立てて提案してほしいと思います。単に子どもと高齢者を組み合わせると、交流を持ち支え合うというものではなく、そこを乗り越えた具体的な提案がほしい。さらに、高齢者

という問題に正面から向き合ってほしいと思います。**乾** そうですね。ここでは高齢者施設を提案してもらうわけではありませんよね。ネガティブなイメージを持ちがちな、高齢者や老人という言葉は使わないでテーマを設定できないかと思うのですが、「100歳の集合住宅」というのはどうでしょうか。それは超寿命住宅という意味ではありませんし、100歳の人のための住宅という意味でもありません。それぞれが自由にテーマを解釈して、年老いた人がいかに楽しい暮らしができるか考えてほしいです。

**藤本** それはいいですね。従来の高齢者を対象とした暮らしや建築などに対する考えはある程度固定化しています。まずはそこを考え直すことから挑戦してほしい。さらにそこから現状否定ではなく広がっていくようなもののがよいですね。住人を何歳に設定するかでいろいろと変わってくるでしょうね。年老いた暮らしの幅が広がるようなアイデアが出てきてくれればよいなと思います。

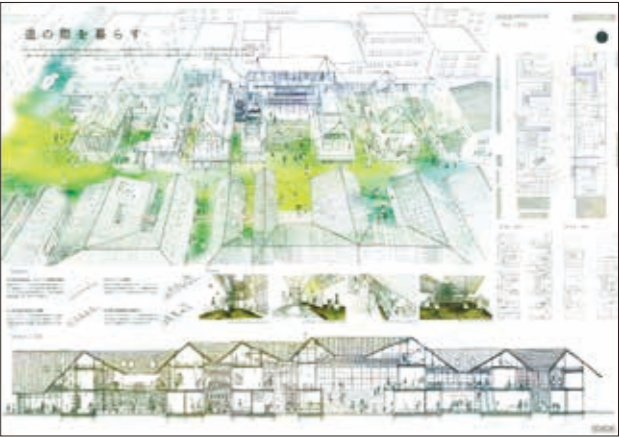
**池上** そうですね。年老いた暮らしが楽しみになるようなテーマを想像してほしいですね。敷地は都心で、若干高低差があるところが面白いのではないのでしょうか。規模は30戸くらいが現実的であると思います。

**隈** 高齢者を考える建築はこれから、まだまだ設計の幅を広げて、可能性を見出していかなければならないですし、ケアの問題だけでなく健常者として暮らしていくのか、さまざまな可能性を考えることができるテーマだと思います。

——では今回のテーマは「100歳の集合住宅」に決定します。

(2015年5月28日、長谷工コーポレーションにて

文責：本誌編集部)



第8回「ある地方都市のストリートが集合住宅で再生する。新しい暮らしがはじまる」最優秀賞作品「道の隙を暮らす」市古慧 奥田祐大 梶翔太郎（横浜国立大学大学院）